

さけます・内水面シリーズ

内水面漁業実態調査からわかった北海道の内水面資源の経済的価値の転換

キーワード：内水面漁業実態調査、内水面漁業、遊漁

はじめに

豊かな自然環境と多様な水資源に恵まれた北海道では、シジミ、ヒメマスやワカサギなどが内水面漁業で漁獲されます。また、ワカサギ、ヒメマス、イトウなどは遊漁に人気があります。このように、内水面の水産資源は漁業やレジャーと深く結びついており、地元経済の振興に重要な役割を果たしています。

当场では、1970年から共同漁業権者、区画漁業権者を対象とした内水面漁業実態調査を実施し、内水面漁業の漁獲量、生産金額、遊漁券の発券数や販売金額など多岐にわたる項目について調査しています。本報告では1994年以降のデータの集計結果から北海道の内水面漁業と遊漁の現状について報告します。なお、2018年9月より能取湖が海

面に指定されたため、本報告では能取湖の漁獲量、生産金額、遊漁券の発券数や販売金額を除いて集計しています。

内水面漁業の漁獲量と生産金額の推移

1994年以降の内水面漁業の漁獲量は1997年の3,355トンピークに、それ以降は減少傾向にあり、近年ではピーク時の約1/5の漁獲量（770トン前後）となっています（図1）。漁獲量が減少している要因の一つとして、本調査の調査対象である区画漁業権の免許権者数が1994年には30団体だったのが、2023年には14団体とほぼ半分減少していたことから（表1）、内水面漁業協同組合の活動の休止、解散などによる漁業権者の減少が考えられました。魚種別漁獲量では、シジミが最も

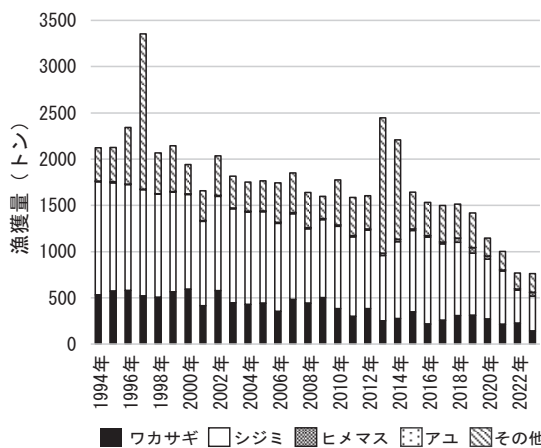


図1 1994年～2023年 北海道内水面漁業の魚種別漁獲量の推移

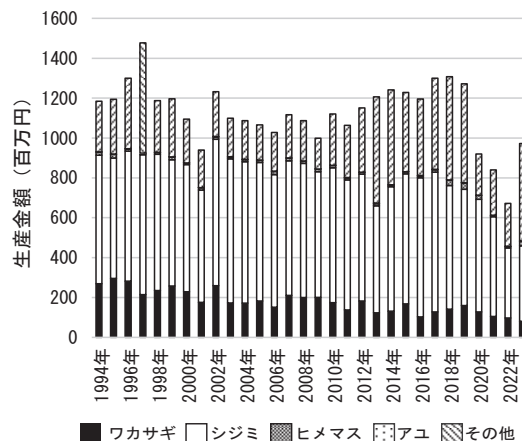


図2 1994年～2023年 北海道内水面漁業の魚種別生産金額の推移

多く、続いてワカサギ、ヒメマスとなっており、30年間、この傾向は変わりませんでした(図1)。シジミの漁獲量は1994年には1,222.6トンでしたが、2023年には約1/3の375.4トンまで減少しました。ワカサギの漁獲量は2000年の594.6トンがピークで、その後、ゆるやかに減少し、2023年の漁獲量は143トンとピーク時の約1/4に留まりました。一方、ヒメマスの漁獲量は、1994年には7.3トンでしたが、ゆるやかに増加し、2019年の60.5トンがピークとなりました。

続いて、1994年以降の内水面漁業の生産金額の推移をみると、漁獲量と同様に1997年の14億7,665万円がピークとなった後は減少傾向にあり、最近では10億円を下回る生産金額で推移しています(図2)。1994年から2023年までの魚種別生産金額の多順からシジミ、ワカサギ、ヒメマスでした。シジミの生産金額は2002年の7億3,430万円がピークでその後、徐々に減少し、2023年は約1/2の3億7,885万円でした。ワカサギの生産金額は1995年の2億9,596万円がピークで、それ以降減少し、2023年には約1/4の8,027万円となりました。一方、ヒメマスは1994年に1,549万円でしたが、それ以降、1,000万円前後(700~1,600万円)で変動し、2018年以降、2019年に3,287万円、2021年には599万円と変動が大きいものの、ゆるやかな

増加傾向にあり、2023年には2,219万円でした。

内水面遊漁の発券数と販売金額の推移

次に、内水面の遊漁の実態について、内水面漁獲量および生産金額と同様に1994年以降のデータを集計しました。遊漁券は日券、期間券、月券など種類が複数あるのですが、本報告では種類別に集計せずに発券された総枚数で集計しました。

内水面遊漁券の発券数は1994年に約6万枚であったのが徐々に増加し、最近では約1.5倍の9万枚前後になりました(図3)。魚種別に内水面遊漁券数をみると、1994年はワカサギ、シジミ、アユ、ヒメマスの順に多く、ワカサギが全体の5割を占めましたが、2023年にはその割合が増加し、8割以上を占めていました。これは近年のアウトドアブームに加えて、ワカサギ釣りは釣り具一式が他魚種より安価でかつ小型なため保管や運搬に困らないこと、防寒トイレなどの設備、さらにレンタル釣り具などが整った釣り場が増加したことから、釣り初心者から熟練者まで広い層に人気があったと考えられました。

続いて、内水面の遊漁券の販売金額の推移をみると1994年に4,975万円だったのが、近年では1.8倍の9,000万円前後となっていました(図4)。魚

表1 内水面実態調査の調査対象とした内水面区画漁業権と共同漁業権の免許数および免許者数の推移(1994~2023年)

	区画漁業権		共同漁業権	
	免許数	免許権者数	免許数	免許権者数
1994年~1998年	31	30	55 (39)	35
1999年~2003年	25	23		
2004年~2008年	21	19	55 (34)	36
2009年~2013年	17	19		
2014年~2018年	17	16	52 (20)	35
2019年~2023年	15	14		

※共同漁業権の免許数の()内の数値は遊漁規則を制定した免許数

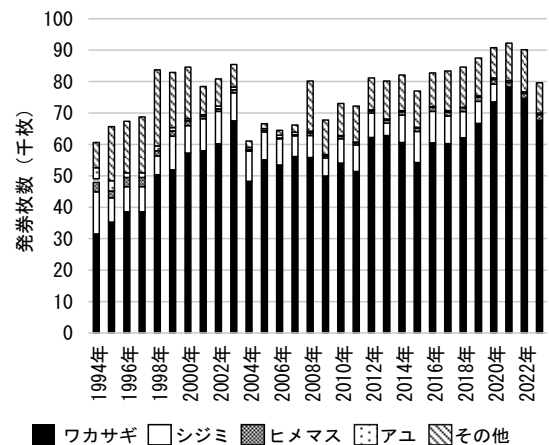


図3 1994年~2023年 北海道内水面の遊漁券の魚種別発券数の推移

種別に遊漁券の販売金額をみると、1994年にはワカサギの遊漁券の販売金額が2,262万円だったのが、2022年には6,578万円まで増加していました。この金額は、先に述べた2022年のワカサギの生産金額(9,792万円)の67%に及びます。これらのことから、ワカサギは単なる漁業資源としてだけでなく、レジャーを通して地域経済を動かす大きな価値を有していると考えられます。

おわりに

日本釣用品工業会によると釣用品国内出荷金額が2012年以降増加しており¹⁾、特に2021年以降、その傾向が顕著であるとの報告があります²⁾。出荷金額が増加した要因としては、近年のアウトドアブームに加え、新型コロナウイルスの影響で遊漁がソーシャルディスタンスを保ちながらリフレッシュできる活動として注目されたことによるものとあります。このような、近年、釣用品の販売金額が増加していることを受け、遊漁の価値について、社会価値や経済価値を推定する報告が多数あります。そのうちの一つに、京都府丹後海(内水面魚種ではない)での事例では、年間約15万人の遊漁者が訪れ、釣行に使用した年間の経費が約38億円、消費者余剰が117億円と推定している研究があり

ます³⁾。消費者余剰とは、消費者が支払っても良いと考える金額から実際に掛かった経費を差し引いた金額を指します。つまり、遊漁者はまだ117億円を遊漁に支払う余地のあることを意味しており、遊漁が観光業の一部として地域経済に大きな影響を与えていると考えられます。また、北海道の希少種である然別湖のミヤベイワナと朱鞠内湖のイトウを対象とした遊漁について、遊漁者の消費実態を調べたところ、遊漁者の消費活動による経済的価値は然別湖のミヤベイワナでは3,300万円、朱鞠内湖のイトウでは4,200万円程度とした報告⁴⁾があります。これらの報告から、内水面資源を対象とした遊漁は今後も、地域経済を支える重要な役割を担うことが予想されます。ただし、遊漁も漁業も同じ資源を利用することから、遊漁と漁業の両方の視点から資源管理方法を考える必要があります。そのためには、今後、遊漁での釣獲量を把握する手法を開発し、持続的に利用できるように研究を進めていくことが重要と考えております。

参考文献

- 1) 一般社団法人日本釣用品工業会 (2020) 第23回釣用品の国内需要動向調査報告書
- 2) 一般社団法人日本釣用品工業会 (2023) 第26回釣用品の国内需要動向調査報告書
- 3) Terashima Y, Yamashita Y, Asano K. (2020) An economic evaluation of recreational fishing in Tango Bay, Japan, *Fisheries Science*, 86, 925-937.
- 4) 芳山拓, 坪井潤一, 松石隆 (2018) 北海道の湖における希少魚を対象とした遊漁者の消費実態とその金額. *日本水産学会誌*, 84 (5), 858-871.

(佐々木典子 さけます内水試内水面資源部
報文番号B2495)

本著作物の著作権は道総研に帰属しています。

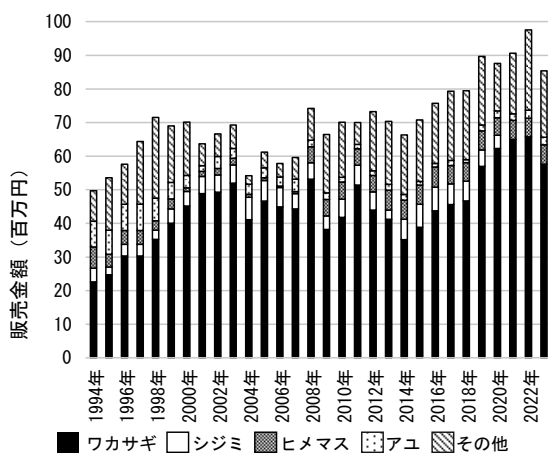


図4 1994年～2023年 北海道内水面の遊漁券の魚種別販売金額の推移